



山崎正和著作集



鷗外・闘ふ家長

中央公論社

山崎正和著作集 7

定価二八〇〇円

昭和五十六年十一月十日印刷
昭和五十六年十一月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

©一九八一 検印廃止

I

鷗外・闘ふ家長

第一部

第一章 ふたつの不安

第二章 ある二十年

第三章 洋行帰りの保守主義者

第二部

第一章 生まれながらの「父」

第二章 闘ふ家長

第三章 勤勉なる傍観者

第四章 見る人・演じる人

第三部

第一章 愛情のやうな雰囲気

第二章 罰せられた人

第三章 「石見人」

あとがき 236

II

「バロツクの」人間像の発見

淋しい人間——夏目漱石

鎖された成熟——田中千禾夫

III

若い藝術家 315

『聖女ジャンヌ・ダーク』 317

バートン主演の『ハムレット』 319

現代の円型劇場 320

277 247 243

210 188 164

- 成功したニューヨーク能公演 323
- ユニークな東洋の発見 324
- オルピーの新作『小さなアリス』 326
- アメリカ演劇文学の不振 328
- 演劇と小劇場 330
- はじめての演出 333
- 戯曲は二度うまれる 334
- 《舞台の可能性への試み》 336
- ある疑心暗鬼 338
- 現在位置 340
- 兇暴なチエーホフ 343
- 「知識」のこちら側・向かう側 345
- 戯曲と雄弁 348
- 「檐板漢」 350
- 〈公開質問状〉劇作家の未来 352
- 日本人と「悲劇」 354

フィレンツェの『世阿彌』公演 357

「変はらざる」ヨーロッパの旅 360

文化外交に発想の転換を 363

ある賞をめぐる論争 367

反・文学的演劇の時代ののちに——「手の会」のこと 370

「新劇」使命観の減退の時代に 375

もうひとつの實朝像 378

三年目の君子の交はり 381

ヤン・コット氏のこと 383

劇と散文のあひだで 384

劇・歴史・現代 387

劇と現実——ピントーの場合 391

山崎正和著作集 7 鷗外・闘ふ家長

I

鷗外・闘ふ家長

第一部

第一章 ふたつの不安

第二章 ある二十年

第三章 洋行婦りの保守主義者

第二部

第一章 生まれながらの「父」

第二章 闘ふ家長

第三章 勤勉なる傍観者

第四章 見る人・演じる人

第三部

第一章 愛情のやうな雰囲気

第二章 罰せられた人

第三章 「石見人」

あとがき

第一部

第一章 ふたつの不安

明治十七年八月二十四日の朝、二十三歳の鷗外・森林太郎は、フランス商船メンザレー号に乗って横浜港を旅立った。若い二等軍医は「独逸学ハ勿論普通医学之儀ハ充分」の能力を認められて、これから四年間、「陸軍医務取調」のためドイツへ留学するのである。

昂揚した気持を、林太郎はその前日の日記に次のやうに書き記してゐた。

明治十七年八月二十三日。午後六時汽車は東京を発し、構浜に抵る。林家に投ず。此の行の命を受くること六月十七日に在りき。德国に赴いて衛生学を修め、兼せて陸軍医事を詢ぬるなり。七月二十八日闕に詣で天顔を拜し、宗廟に辞別す。八月二十日陸軍省に至り封伝を領す。初めて余の大学を卒業するや、蚕くも航西の志あり。以為今この医学は泰西より来たる。縦使その文を觀その音を諷するとあれども、苟くも親しくその境を履むに非ざれば、則ち郵書燕説たるのみと。明治十四年に至り学士の称を叨辱す。詩を賦して曰く。「一笑名優質却辱、依然古態聳吟肩、觀花僅覺真歛事、題塔誰誇最少年、唯識蘇生愧牛後、空教阿迷着鞭先、昂々未折雄飛志、夢駕長風万里船」。蓋し神は已に易北河畔に飛びたり。未だ幾もなく軍医に任じ、軍医本部の僚属となる。躑躅鞅掌して、簿書案牘の間に汨没すること此に三

年。而うして今茲の行あり。喜び毋しとするを得べからざるなり。(「航西日記」原文漢文)

三年まへ、明治十四年に東京大学を卒業してから、彼は軍医本部でプロシア陸軍の衛生制度などを調べながら、もっぱらこの日を待って暮らして来た。これまでドイツ留学に派遣された三人の軍医の誰よりも若く、彼は身内に旺盛な好奇心と、「嘗て挫折したことのない」尽きせぬ力の蓄へを感じてゐた。その若い力に同じく若い明治国家は切実な期待を寄せてゐて、彼もまた、その期待をなまなましく身に触れて感じる事ができた。ほんのひと月たらずまへ、七月二十八日、彼は宮中に招かれて、明治天皇から親しく励ましの言葉を受けたばかりであった。それは尊大で余裕のある激励といふよりは、むしろ国家がひとり青年にかけた切ない依頼の言葉であった。小さな、無力な国家が彼を送り出して、「頼むよ」と、肩に手をかけてゐるのが彼にはまざまざとわかつたはずである。なぜなら、彼にはやはり小さく無力な家があつて、祖母と母親と養子の父親が、この長男にいぢらしい希望をつないでゐたからである。

国家が再編成される激動期に、森家の属する津和野藩は小さく、藩主の亀井子爵ともども林太郎の一家は新しい首都の混沌のなかに投げこまれた。故郷の土から切り離されたとき、人間の帰属本能はいやがうへにも血統がつくる家のつながりに集中する。しかもこの一家は新しい社会秩序のなかで、自分が何者であるかをあらためて証明しなほさねばならない運命を担つてゐた。それはあたかも、明治国家が近代世界のかなかで置かれた状況の縮図であつて、林太郎はこのとき、重なりあふふたつの生存の意志を代表して旅立たうとしてゐたといへる。

水柵天明るうして警柝鳴る
渭城歌罷みて又航を傾く

烟波浩蕩として心胸豁し
好し扁舟を放たむ万里の行

(航西日記)

時代の青年らしく、彼は船上で氣負った漢詩に感慨を歌ひ、同行する九人の留學生とともに、たがひの専門および出身郷国を名のりあつた。政治学者の穂積八束は伊予の人であり、物理学者でのちに音楽の研究で知られる田中正平は淡路の国の人であつた。石見の国から来た若い軍医と同じく、仕事と郷国のふたつは当時の青年の身許証明にほかならず、それだけを聞くことで彼らはたがひにうちとけあふことができた。竹のデッキ・チェアに身を横たへて、身心ともに健康な林太郎の氣持は子供のやうに満ちたりてゐたやうである。遅い船足は遠州灘の沖をすぎるとはぼ半日を費やし、遙かに富士の山頂を見をさめるころには、落日はたちまち夏の空を「芙蓉色」に染めあげて行つた。

独り森生有りて閑にして無事
軒息雷の若く誰か敢へて呵めん
他年歐洲に遊んで已に遍ければ
帰來の面目果して如何

(航西日記)

それから約五十日ののち、十月初旬に船はマルセイユに着くのだが、この航西の旅を通じて鷗外の心に迷ひのあつた形跡はない。この旅に先立って、といふよりたぶんもの心ついたときから、彼には果すべき人生の課題と、それを果して行く能力に疑ひを抱く必要がなかつたからである。

もちろん、その自信はときをりあまりに大きすぎて、彼もあたへられた仕事にふとむなしさを感じるこ